

研究の葉

日本古建築研究の葉 (第三十六回)

天沼俊一

第三十四 窓 (下の下)

(ホ) 其他の窓

昨年一月より今迄七回に亙り、連子窓及花頭窓に就て記してきたが窓の種類は限りなく、従てあらゆる場合を考へてゐてはきりが無い。窓をかきたしてから今度で八回目、丁度滿二年になる。だから今回はいろいろな種類のもの十八を一所に記し、一先づ終りとするつもりである。

第三四三圖は八幡の八角院の筋向ひ、西村芳治

* * * * *

郎氏邸の玄關脇の塀の窓である。直角三角形で故意か偶然か殆んど三邊が3・4・5の割合になつてゐる。勿論極く新しいつまらぬもので、漆喰塗の職人がたゞやつてみたに過ぎぬのであらうが、聊か形が氣に入つたのである。先づあまり類例はあ
るまい。

序ながら正三角の窓は實例を舉げ得るが不等邊三角形のは恐らくあるまいと思ふ。

第三四四圖は南信の都會なる伊那町所在、常圓

* * * * *

寺の塀についてゐるもの。頭を三角形に尖らした連続窓で、いはゞ劍頭紋を上に向けておいたやうなものである。此も亦天下一品の仲間らしく、随分氣をつけてはゐるが、ついこの様なのはまだ他に見出さぬ。形がよくも何ともないが、この様な變つたものも存在するといふ證據に圖示することにしたのである。

* * * * *

第三四五圖は縦に長い四角な窓であるが、其狭間飾が、これも水平垂直であるに過ぎぬが、如何にも支那式を現はしてゐる取扱である。早い話が第一七四圖(第一二卷第四號)に掲げた半扉の縦横の格子を少し込み入らしたやうなもので、さうして下方に近く中央の線に沿ひて、小さい正方形の空隙をつくつてある。これは何のためか知らぬが、變化があつてよろしい、單純なやうな複雑なやうな面白いものである。例へ支那の直寫としても、我國現存

の直線式のものとしては正に第一流といへるであらう。

第三四六圖は實に南山城の古寺の一なる善法律寺の庫裏の便所の窓である。故に小さい窓である。便所の窓で少し汚いやうであるが、狭間飾が面白いので寫真にだしたのである。種あかしさへしなければ何處の窓だか判らないから有難く見えるであらうが、かう白狀して了ふと急に安つぽく且つつまらなくなるかも知れない。

併しながらよく次の點に注意して貰ひ度いのである。第一にこの窓を太い縦の線で二等分する代りに、少しく左によせて二つに分ち、右の方を正方形、左の方を長方形にしたところの考へが甚だよろしい。第二に並んでゐる二つの窓に共通に、上と下とに水平に細い棧を設けてあることで、かうした結果は右と左と統一があり、而も全然異なつた感を與へる窓ができ上つたのである。

右の方形の方は、更に縦に四隅に小正方形が残る如く縦棧をやり、四隅に等面積の大直角等脚三角形、八方に小直角等脚三角形を形作る如く、45°に棧をやつてある、だから詰り中央に大きな正八角形ができ上つてゐる。

左の方の長方形の部分は、縦框に平行に、上下の棧が離れてゐる程離さず、且つ上下の棧よりでない様に縦棧をやり、其内の部分に横に水平に、上下の棧が框より離れてゐると同じ丈け間をはなして二本の平行せる棧を、縦棧よりでぬやうにつくつたのである。(右二項、窓の棧即ち狭間飾に就いて記したことを、これより簡單にかきやうがなにくくいやうである、だから寧ろこの二項をよまずに、第三四三圖を勧めること)

其結果は相隣れる二つの窓が、全然異なつた感じを興へてゐるが、夫れでゐて左右統一がある面白いものができるのである。圖は窓の大きさが判るやうに、其小さい方の中央に曲尺の約五

寸實は英國製一呎の半分即ち六時の物指をたて、おいたのが、偶ま棧の大きと同じ位の幅であつたため、窓の美觀を害したかも知れぬが、大したことはあるまい。

斯く迄に意匠の働いたものを便所の小さな窓だからといつて朽ち果てさせるのは如何にも惜しい恐らく實物をみた人は殆んどあるまいと思ふから、此機會にかゝる窓の存在を廣く公表し、無名の計劃者を表彰しやうと思ふのである。

* * * * *

次に六角窓を二つばかり示しておく。其一是副産物の傾きがあるが第三四五圖の狭間飾の間から、透けて見えてゐるもので、興福寺三江會所の窓の一つである。別に變つたところはない、至極平凡なものである。正六角形。

第三四七圖は松花堂茶室の地下窓で、不等邊六角形といふよりは、二直角六角形とでもいつた方

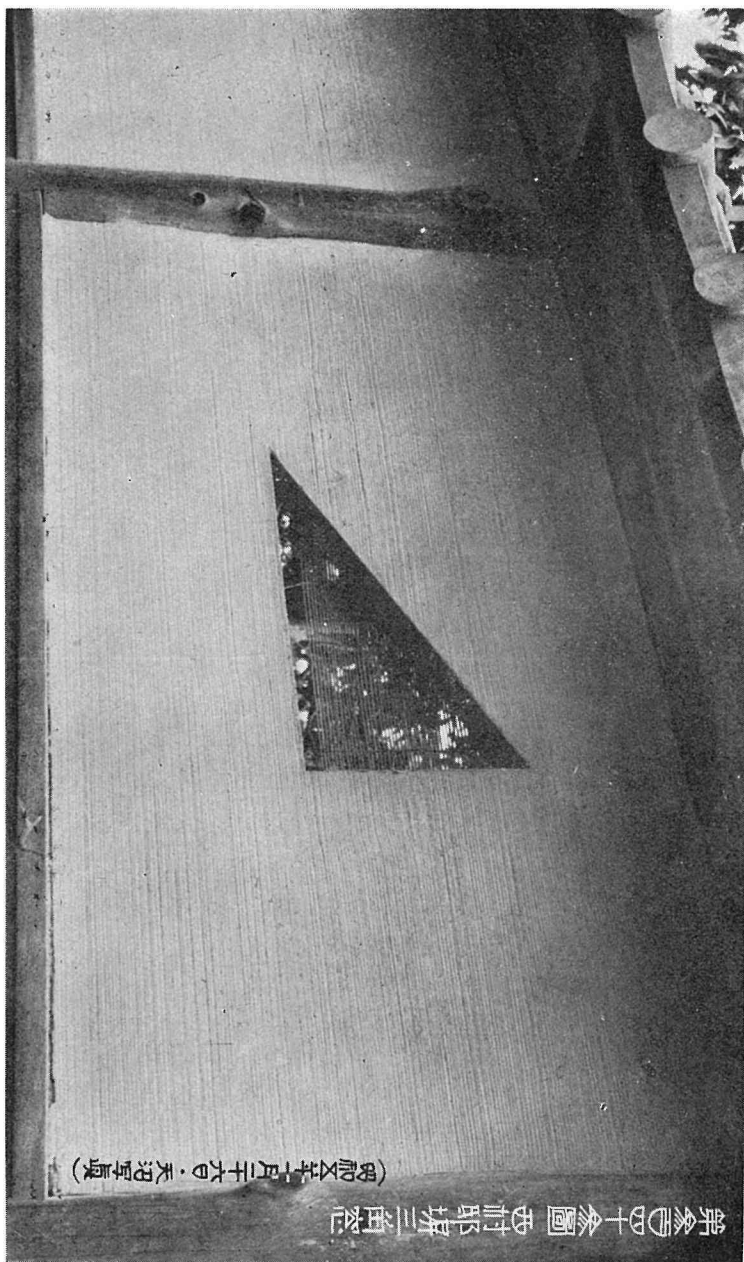
が、これに近い形が考へられるかも知れない。即ち長方形の窓と右上下を斜に少しそぎ取つたといふ様な形で、何でもないのであるが、それでゐて大變に異なつて見える。六角より邊が多いやうでゐて、數えて初めて六つといふことが判るやうな不思議な窓である。

第三四八圖は大徳寺孤蓬庵の八角窓。八角形の地下窓なんかどこにもでもあり、町を歩いてゐたつて、少し氣をつけてゐれば二つや三つは出遇ふ位に多いが、こゝにはたゞ一例としてこれを圖示したのである。

同じ八角窓でも、長方形の隅切りは趣きが大分に違ふ。かゝる窓は美濃飛驒あたりの民家に最も普通に見出さるゝところで、地方色といへばいへるのであらう。

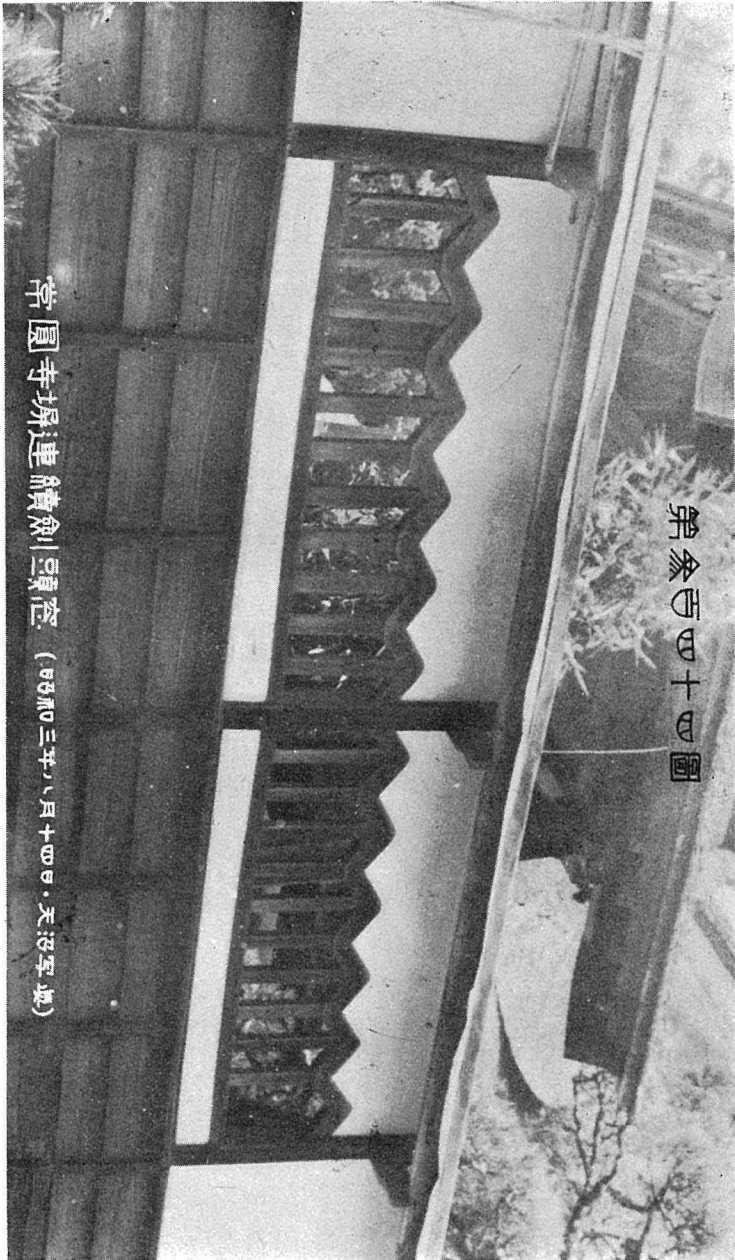
* * * * *

玉蟲厨子の鴉尾の背面についてゐるやうな形の孔を、もう少し上下につぶしたやうな形、即ち心臟型のうちの尖つてゐぬ方の形、むつかしくいふなら、或る直徑の圓が相等しき直徑の圓の圓周上を回轉するとき、最初の圓の圓周上の一點が描く心臟形曲線(Cardioid)、又は圓礪形の光澤ある器に光線がさしたときにできる火線(Caustic curve)を發光體に近き側の圓周の一部とから成れる、同じく心臟の形をした曲線の様な形の窓の實例を、二つばかり次に掲げやうと思ふ。語呂は「火線窓」といつた方がいゝやうであるが、これでは一般に何だか判らないから、少し拙いが「猪目型窓」としておいた。實は少しどころではなく随分拙いのであるが、何といふ名か判らないので假にかうしておいたのである。岐阜縣益田郡(Mashi-dagun)萩原町大字中呂(Chūryō)の禪昌寺では、庫裏の切妻の煙拔のため、此種の形の少しくづれた地下窓を二



第參圖 中村那堪三角窓

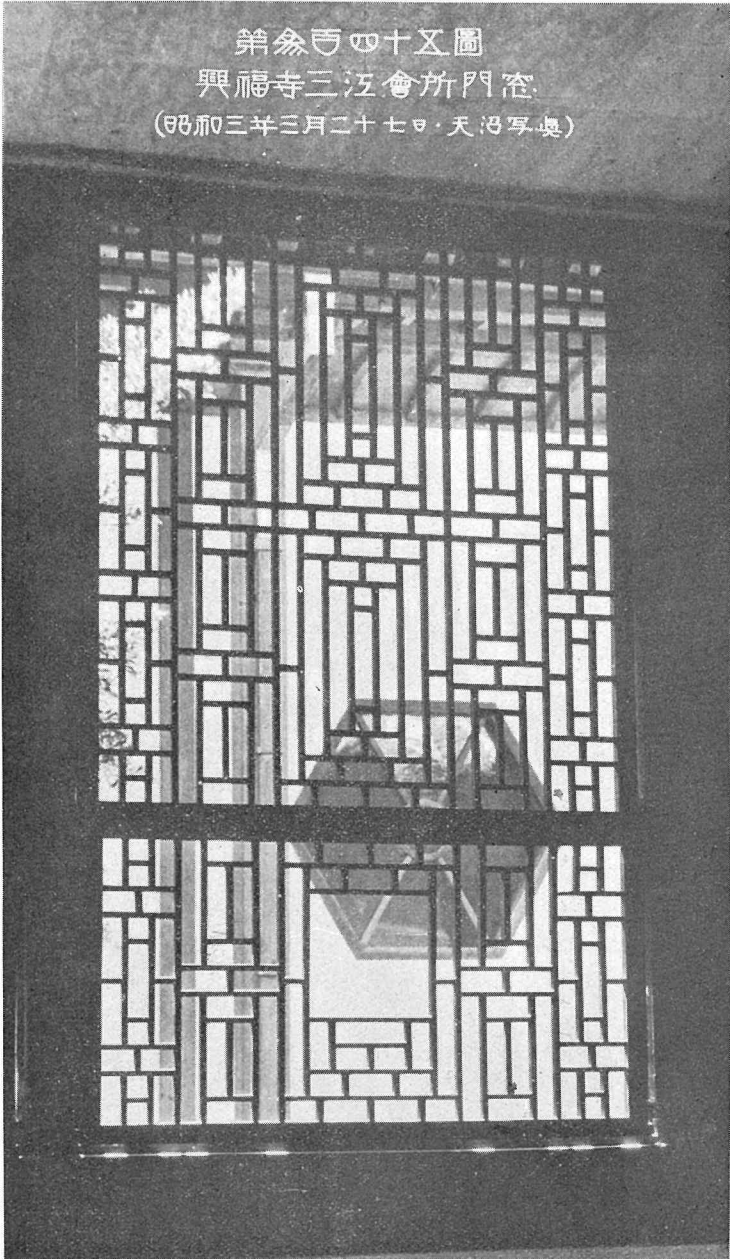
(卯辰年十二月十六日・天沼屋敷)



樂參西四十四圖

常圓寺塙連續劍|三寶窓 (昭和三年一月十四日・天沼軍城)

第參百四十五圖
興福寺三注會所門窓
(昭和三年三月二十七日・天沼写真)

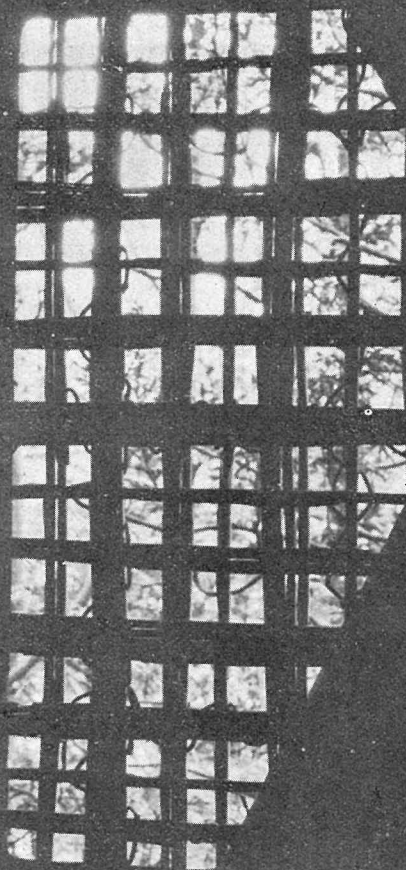




(昭和三十五年六月・天沼野家)

宗參院四十六圖 善法律寺庫裏窓

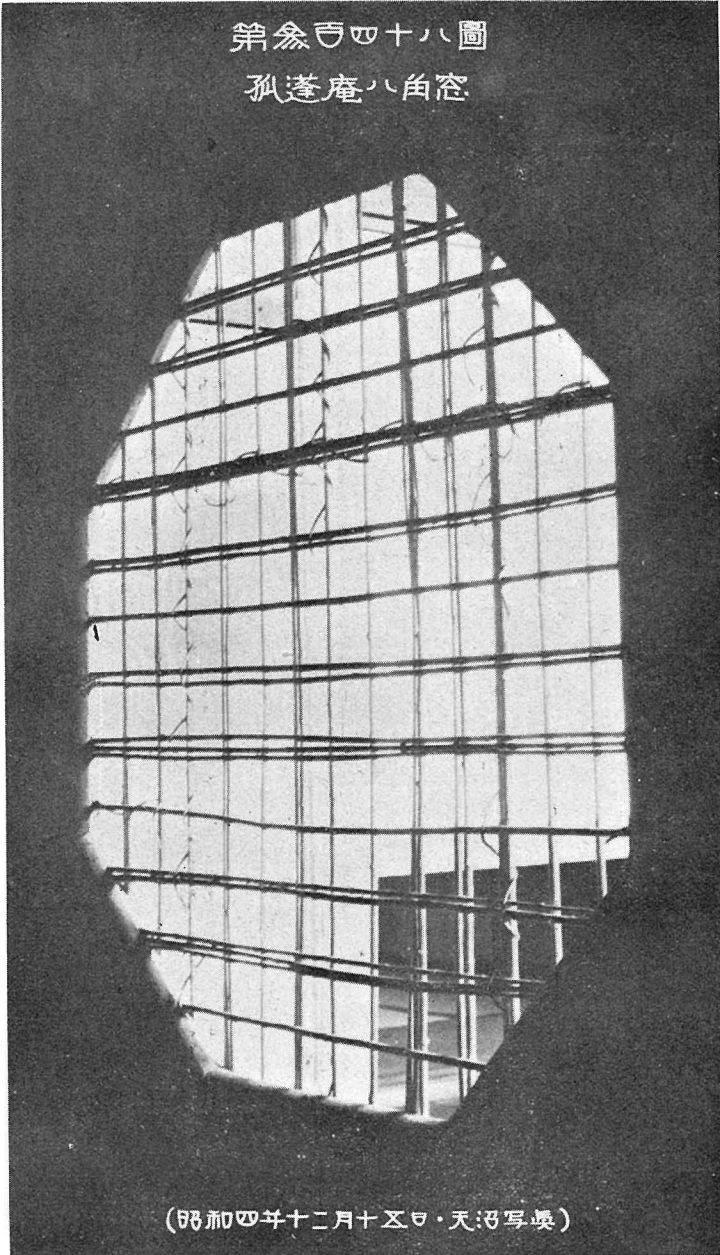
第參百四十七圖
松花堂茶室六角窓



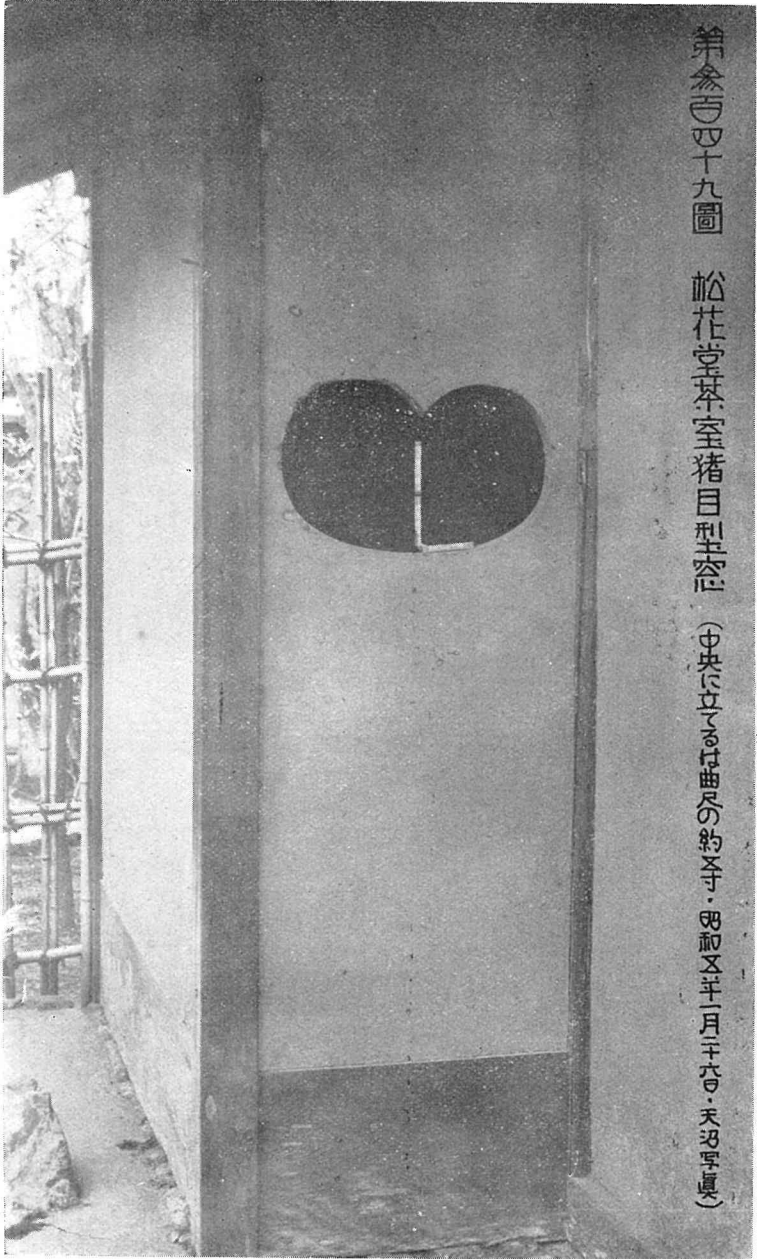
(昭和八年一月二十六日・天沼写真)

第參百四十八圖

孤蓬庵八角窓



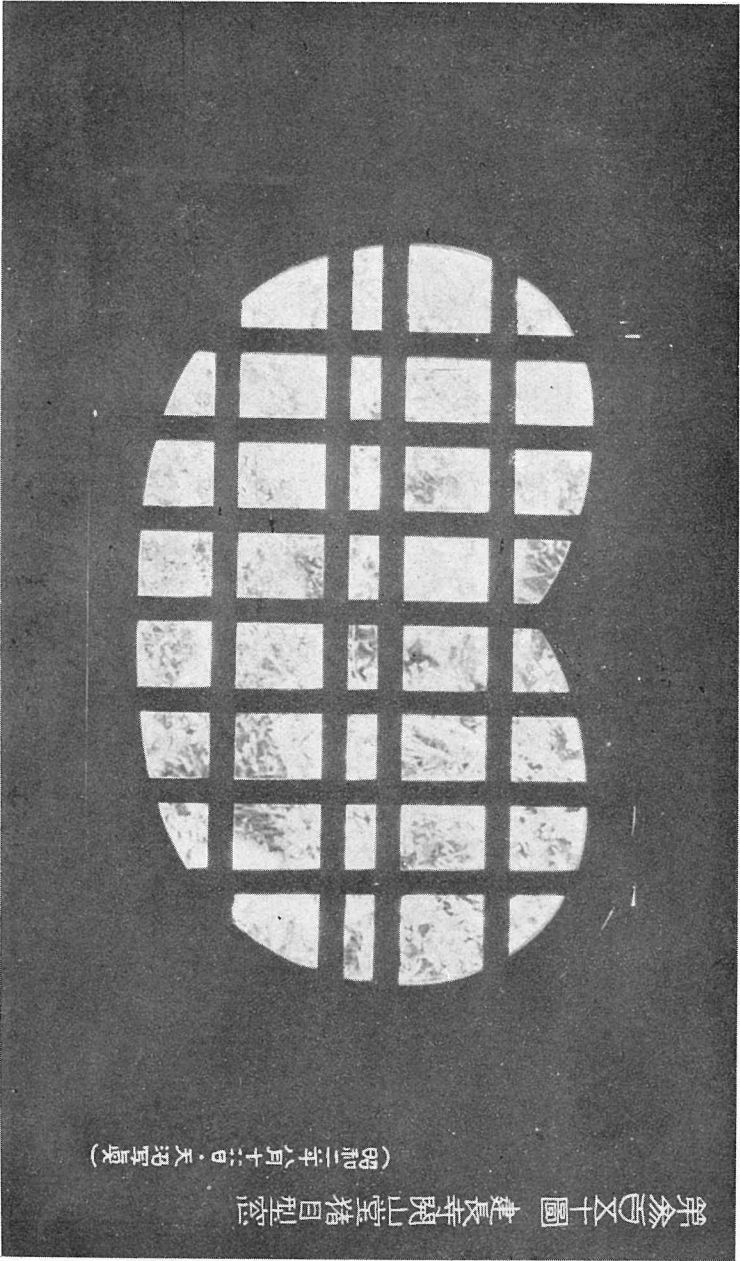
(昭和四年十二月十五日・天沼写真)



第參百四十九圖

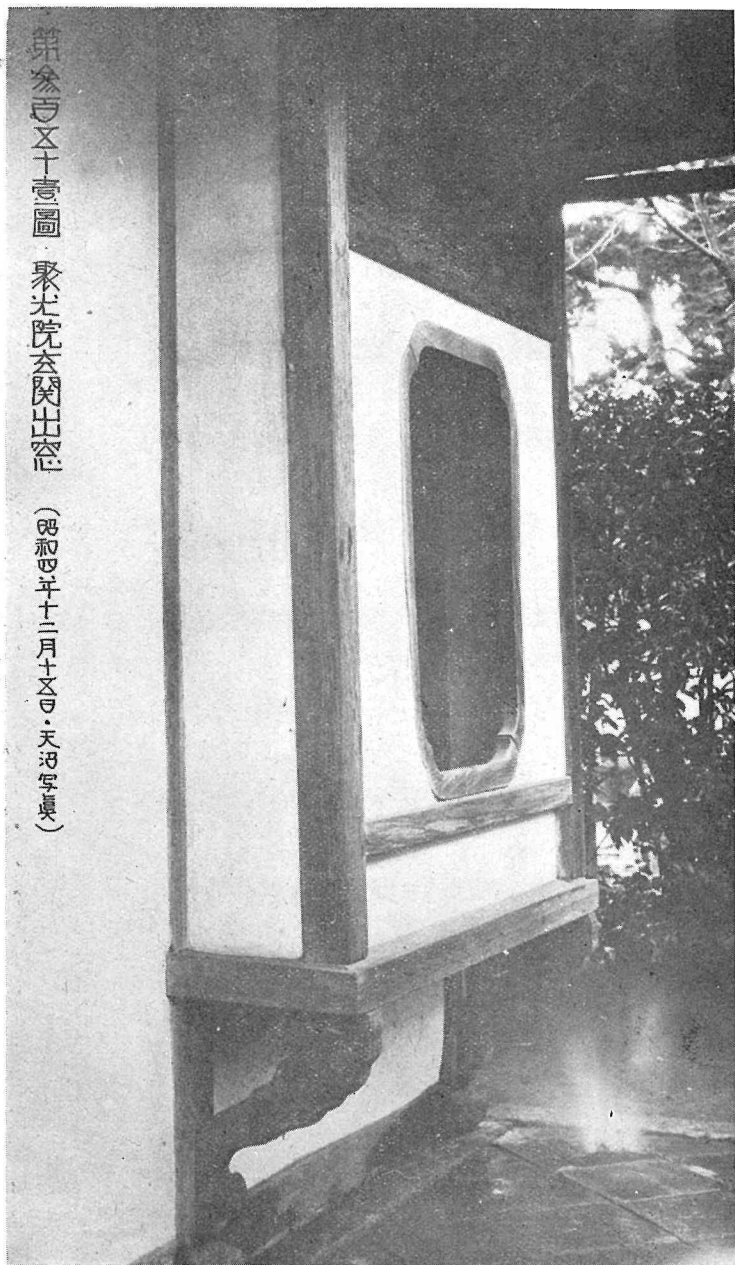
松花堂茶室猪目型窓

(中央に立たるは曲尺の約子・昭和五年二月十六日・天沼写真)



(昭和二年八月十三日・天沼厚夏)

建築文士圖 建長寺開山堂猪目型窓



第參百五十一圖 聚光院玄關出窓

(昭和四年十二月十五日・天沼写真)



第參百五十二圖

桂離宮御幸御殿二の間床脇窓

(昭和三年九月七日・天沼写真)

圖參百五第



窓院藏喜頭塔寺峰剛金

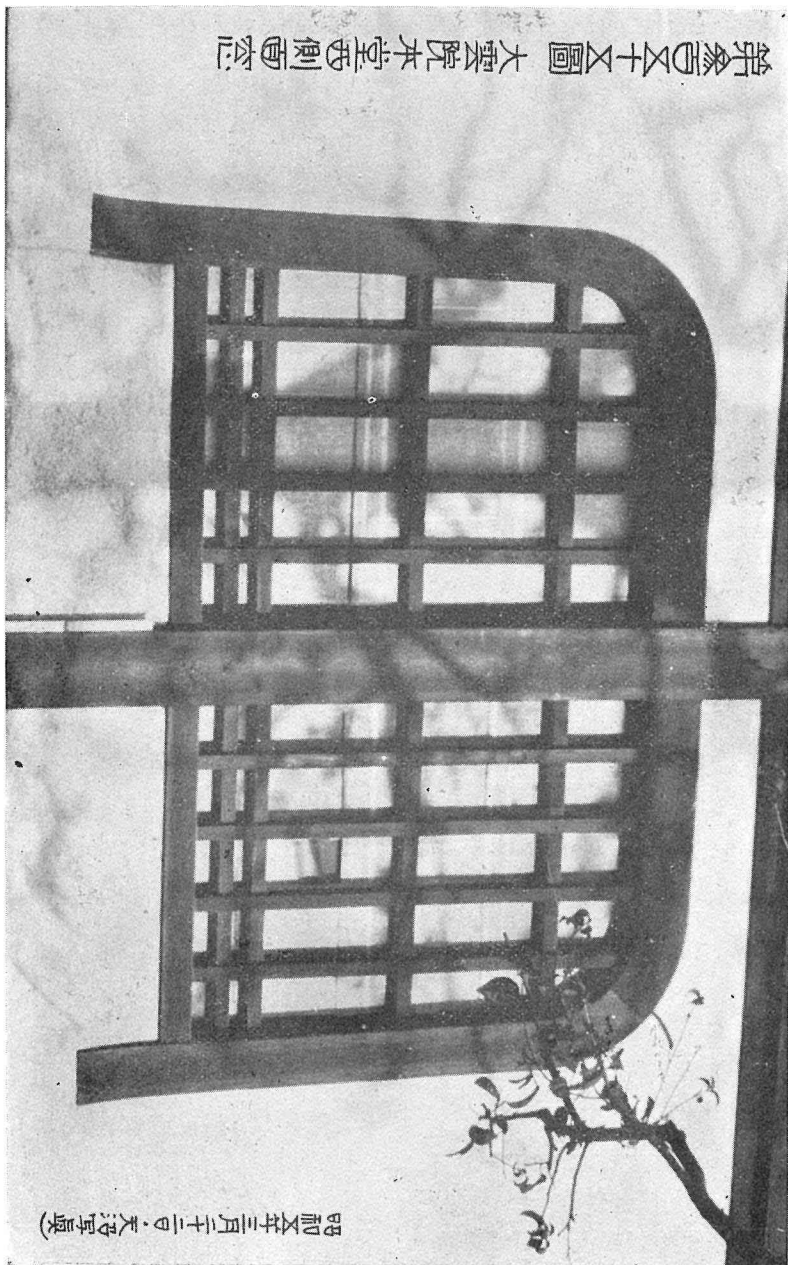
(昭和五年四月一日・天沼写真)

第參百八十四圖



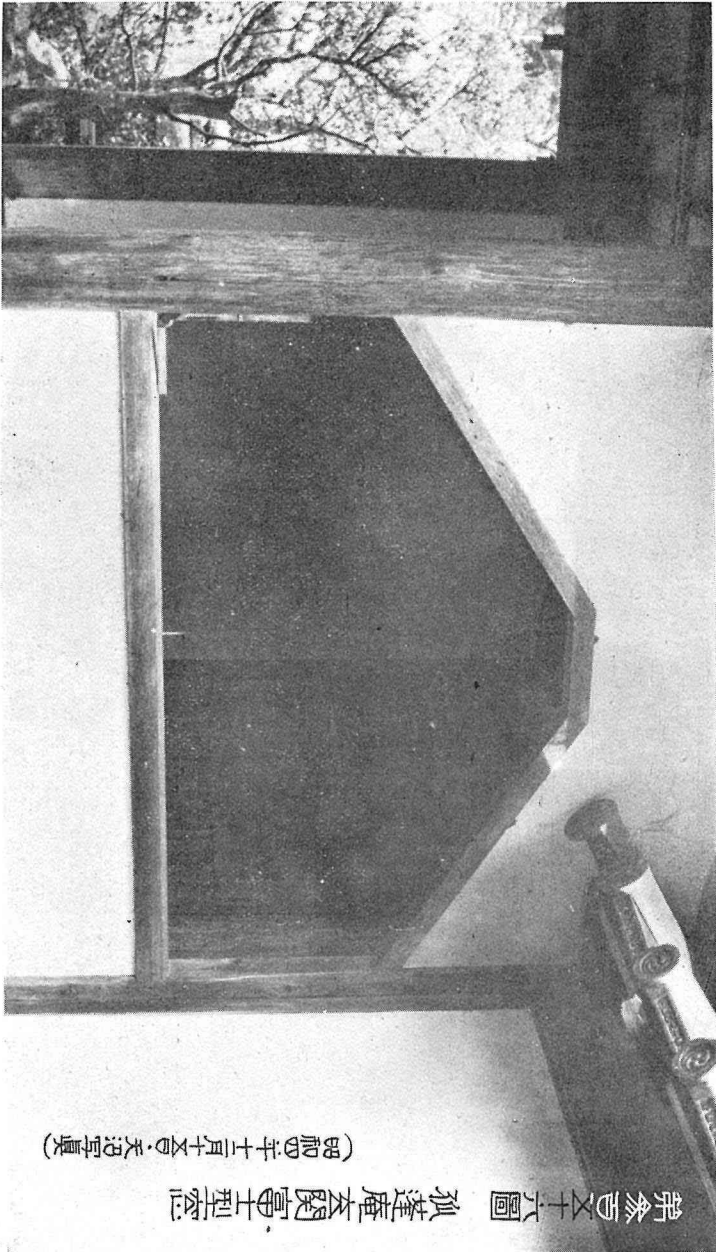
常寂光寺本堂前休憩所窓

明和五年四月六日(天沼草堂)



第參圖 大雲院本堂西側面窓

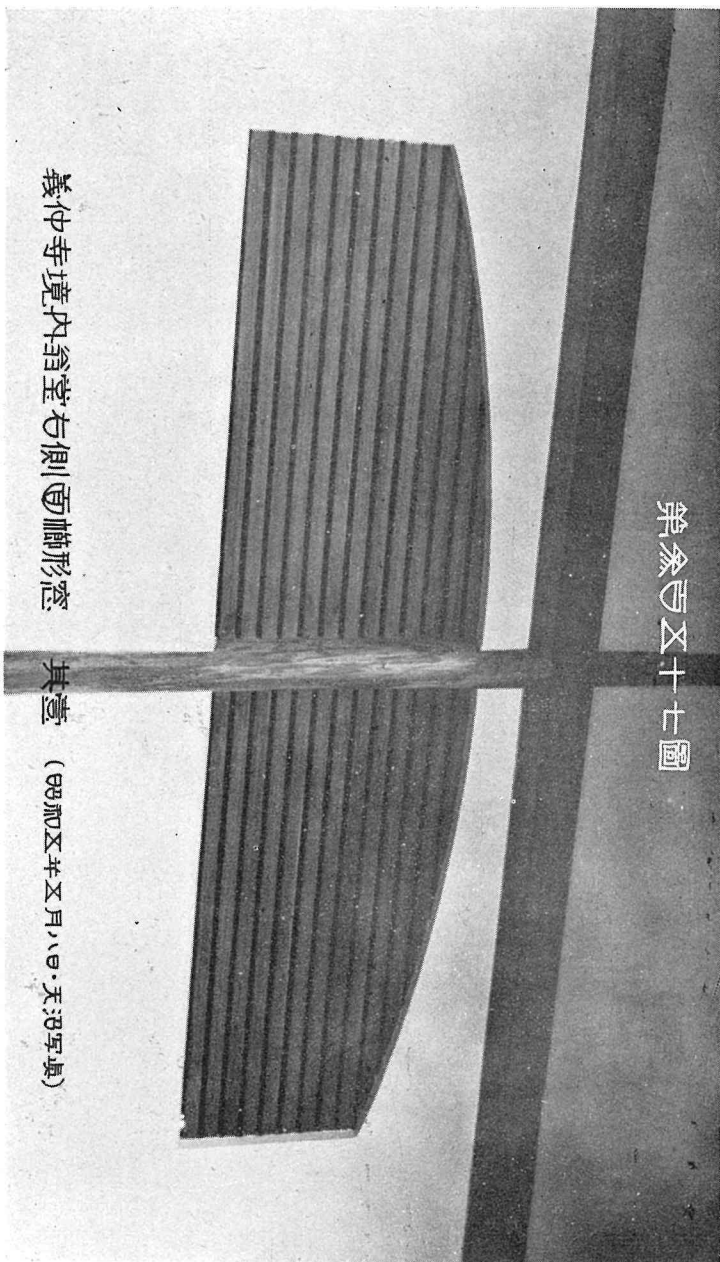
昭和五年三月二十日・天沼學順



(明徳寺・土井十文・天沼屋)

第參百之十六圖 狐邊庵卷閣圖士型窓

築參門区十七圖

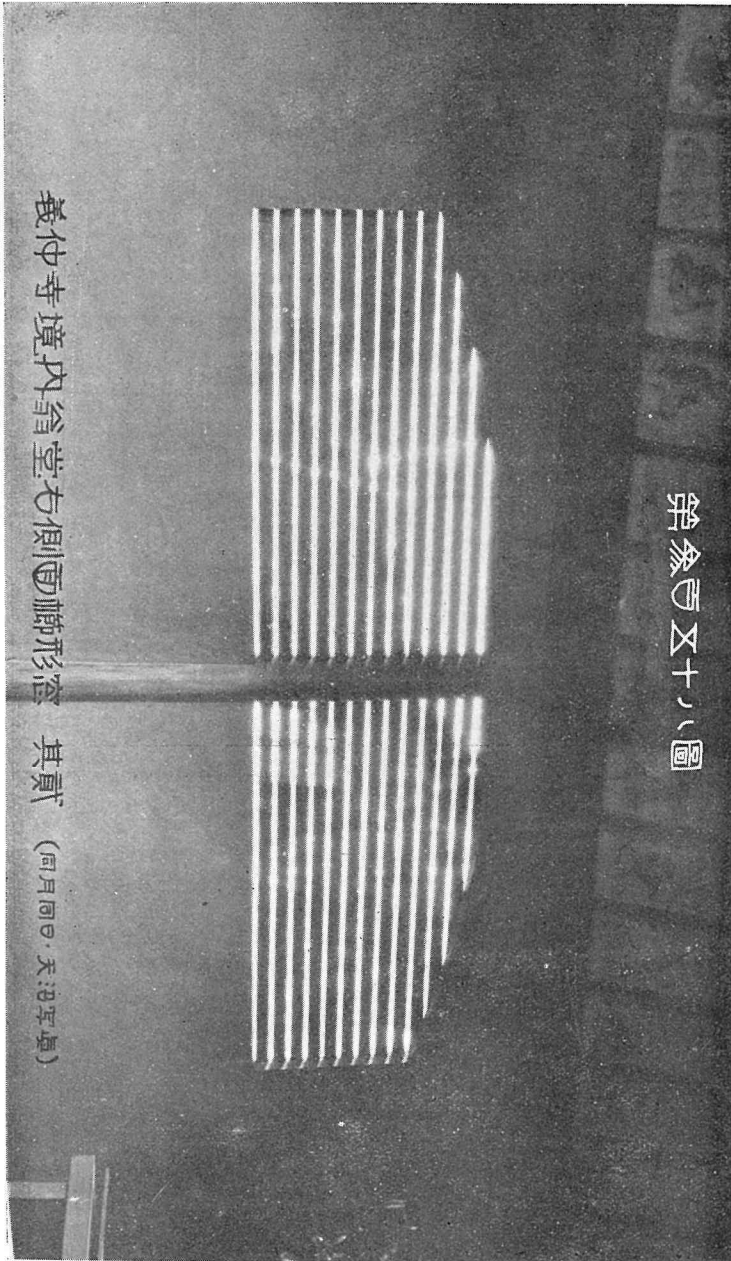


養仲寺境内翁堂右側面櫺形窓

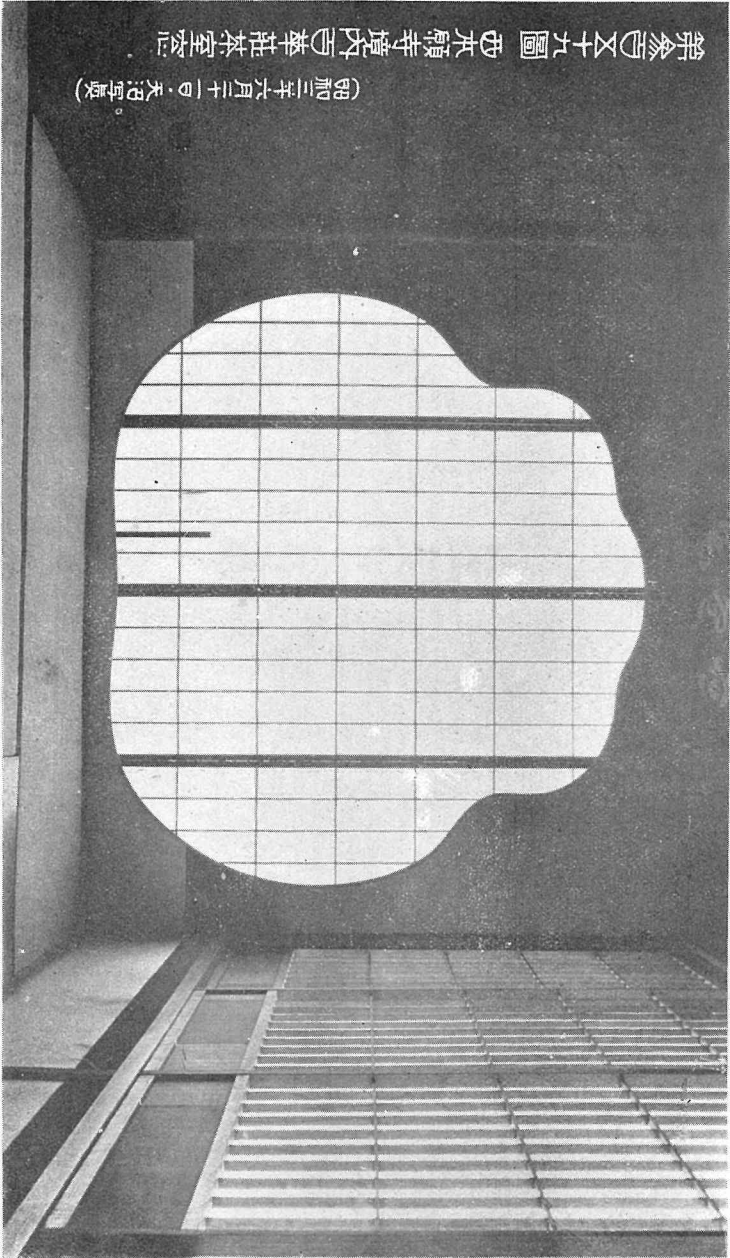
其壹

(昭和区并区月八日・天沼写真)

第參百五十八圖



養仲寺境内繪堂右側面櫺形窓 其貳 (同月同日・天沼塚墓)



參照圖十九 西本願寺障子の華道林窓の形

(昭和三年七月十一日・天沼野郎)



第六百六十圖

桂離宮 膳内 松琴亭 窓 (昭和二年三月十二日・天沼写真・攝・藤野可津)

つ並べて用ひてゐる。

第三四九圖も亦、前前圖と同じく八幡の松花堂茶室の壁にあけてある狭間飾のない小窓で、これも餘り小さいので窓といふ丈けの價値がないかも知れぬが、その定義に當倣まつてゐる以上それに違ひない。中央にたてゝある物指(英國製六吋曲尺約五寸)によりて其大きさが知れやう。

第三五〇圖は鎌倉建長寺開山堂照堂の窓の一。

此は前圖に比べると大分に大きく、横徑約四尺高さ二尺餘、曲線形の框三寸五分位で、狭間飾として格子を入れたもの、此も新しい大したものではないが、恐らく猪目窓としては大型の部に屬するものであらう。

あんなのは窓とはいへない、といふ抗議を受けるかも知れぬが、鳳凰堂中堂正面中央の扉を開く

と上に作りつけの格子があり、其格子のまん中に圓の一方丈けをつぶしたやうな孔がある。これは恰も火線の茨のどころをなくした形で、池をへだてゝ本尊に對すると、丁度顔が拜めるやうにしてある。これは私は窓とみてよからうと思つてゐるがこの方が火線より簡單なところをみると、つまり玉蟲厨子のは別として、最初はこの様であつたのが、後——といつても其間に連絡になるものが見出されぬが——後に前にだしたやうな謂はゆる猪目型になつたとも、或は猪目の外にでた茨がなくなつたとも、何れとも考へられるであらう。

第三五一圖は大徳寺塔頭聚光院(Fogin)玄關の窓で、窓は出てゐるから、下の方は木の持送り支へ内は腰をかけられるやうにしてある。かうしてゐるのは此窓のみではない、禪寺の玄關のはごこも大概かうしてゐるのである。

斯様なのは、全體を考へればたしかに出窓といふことができる。此は長方形で四隅が内方に入つてゐて、そこに茨ができてゐること、第二七二圖に掲げた桂離宮構内園林堂(圖にも記事にも園林堂と書いてあるが「園」は「園」の誤り)の連子をとり去つた様なものである。

第三五二圖は桂離宮御幸御殿二の間(第十五卷第一號第二九三圖)

に掲げた御幸御殿一の間(上段)花頭窓のある次の間の事。

床脇の窓で、殆んど楕圓形のものゝ四隅を少しく内方へ引込ましたものの。いはゆる「木瓜型」に近い形である。楕圓形に四隅も何もない筈であるが、其邊は圖をみて常識で判断すればいゝのである。此に少し角をつけると前圖になり、前圖の角をまるめればこれになるのである。併しながら前圖からこれができたと考へた方がよささうである。或はまた單に楕圓形では餘りに淋しいといふところから、適當のところを適當に内方にくぼめて、この形をつくり出したのかも

知れない。

軒端に下げる燈籠(吊燈)に「清涼殿型」と呼ぶものがある。其窓は恰もこの如き形で、今見出されるものは何れも新しいのであるが、「なよ竹物語」といふ繪卷物の中に、この形の窓をもつた吊燈籠が描かれてゐるのをみると、其繪卷物が鎌倉時代に屬する以上、かゝる窓は少なくとも其頃からあつたといへるであらう。尤も私は其繪卷の眞物を見たのではなく、寫真でみたゞけで、而もどうやら夫れは模寫したのを更に寫真にしたのではないかと思つたのであつた。

京都の博物館には、此種の吊燈が二つでゝあるが、一つには

入内立后節會等ノ時ニ飛香舎ニ釣リテ點火セシモノナリ

といふ解説をつけてあり、もう一つの方には

清涼殿ノ庇御殿並ニ孫庇ト飛香舎トニ釣リ掛ケ

シ鐵燈籠ナリ

といふ札がつけてある。さうして硝子越しにみたのだから、少々あてにならぬかも知れぬが、ごうしたつてこれ等は江戸時代とするより他に仕方のないものであると思つた。

其形式から考へたつて、桃山時代より前にはもつて行けぬものであると思ふ。けれども例へ此等は新しいとしても、古い繪卷物に繪がかいてある以上、古式を踏襲して新しくつくつたとすれば、即ち古いものと同じ價値があるから、此種の窓が少なくとも鎌倉時代から存在したとしてもいゝ筈である。故に假にさうとしてみても、今日となつては實物が存在してゐるわけではなく、且つものは小さいのであるから、多少形は略してあるかも知れない。尙其上に、例へこの様な小工藝品に此種の窓がついてゐたとしても、大きな建築物の大きな窓にまで、かゝる形を用ひたか否かは判らぬ

のである。

圓窓にしたつてさうである。前號に私は古いところに圓窓はないやうだとかいたが、あれは勿論大きな建築についてゐるのをさしたので、小さいものなら、一例をとれば石燈籠の火袋等には、鎌倉時代のにいづらもついてゐる、だから木瓜型の窓としても、同じやうにほんどうの建築に用ひられたたと考へられる時を以て、其起りとする方が穩當であると思ふ。桂離宮のはほんもので大きいしするから、此種の窓としては、これあたりが古い方としてよからう。

繪卷物中に描かれたる小さい繪を元にして、かゝる形の窓を云云するのは不都合かも知れぬが、とにかく似たものがあつたやうだといふことだけを紹介しておき、もう少し調べた上で、何とか意見を述べるつもりにしてゐるといふことだけを、こゝでは斷つておくに止める。それまではやはり桃

山江戸時代からとしておく。

第三五三圖は高野山金剛峰寺塔頭喜藏院の窓。

如何に努力しても、これより拙い不愉快なものでは
できさうにない。花頭窓から考へついたものか、
或は花頭窓がよく判らずにしたのか、どちらか知
らぬが、中々これは金剛三昧院の珍奇な吊鐘型の
窓(前々號第
三二八圖)等の及ぶところではない。出入の大工
か何か、一生の智慧を絞つた傑作かも知れない
が、私は好きでない。壁の色が鼠色のところに、
輪廓の線が白色だから、變な取合はせでどうも工
合がよくない。

第三五四圖は常寂光寺本堂前にある粗末な休憩
所の窓。曲つた木が枯れたかどうかしたので、伐
つて其まゝ窓枠に應用したものであるが、下框丈
けはごうにもならぬため、別の木をもつてきたの

である。全體としては半圓窓の様になつてゐるけ
れども、態々つくつたものではなく、勿論相當に
手入はしてあるが、いはゞ自然木を其まゝ用ひた
のだから、結果は夫れに似たことになつても、こ
ゝでは半圓窓としては取扱はなかつたのである。

第三五五圖は既に前々號及び前號に於いて例を
舉げた如く(第三一九・
第三二二圖)、柱を挟み其兩方に半分づゝ
あるもので、第十五卷第二號、第二四八頁下段よ
り次頁の上段にかけて、此窓のことを少しくか
ておいたが、此寫眞でみる通り、ほんどうの名を
私は知らないため、名をつけることができないが、
退化した花頭窓としても、方形の窓の兩上隅が圓
くなつたとしても、どちらでもよからう。ごにか
現在の有様では花頭窓のやうに不合理ではな
い。形は拙くとも相當に見られる。

第三五六圖は大徳寺塔頭孤逢庵の玄關脇のもので、富士形窓とでもいつたらばいゝか。窓の内に見えてゐる棧唐戸は玄關の扉である。これも亦明け放しで狭間飾なしの窓。大したいゝものではなく、同時に左程感心もせぬが、去りどて決していやなものではない。但し全然狭間飾を缺いてゐるのは如何にも淋しい。霞がかゝつてゐるところのつもりで、下の方に横に二三本と縦にも目立たぬやうに何か入れたらごんなものになるか知らんと思はれる。但しこれはしてみたのではないから、反ていけないかも知れぬ。

* * * * *

第三五七・三五八の二圖は、大津市所在の義仲寺(Chichōji)境内の一番奥に建つてゐる小さいきやしやな翁堂の兩側面についてゐるものゝうち、右側面即ち向て左側のを外からと内からと寫してみたものである。これも亦柱を挟んでゐるから、

其の點では大雲院のと同じことで、唯これは框がないのと、狭間飾が間を僅かばかり透した水平に並べた木である丈けの差である。故に此窓も亦下地窓で、横木は木摺(Kumite) (漆喰を支へるために、薄打つた)が見えてゐるところに象つたとも考へられるが、まさかそんなことはあるまい。外側は白壁内側は黄土色の壁である。

京都御所清涼殿鬼の間と晝御所との境に、同じく柱を挟んで楕形窓があるが、これは殆んど半圓形—直徑三尺五寸の圓を水平に二等分して高さ一尺七寸五分の半圓形を得、更に下方即ち直徑の直上に於いて高さ一寸を減する時は、高さ一尺六寸五分の缺圓形となる。これが現在のものである—詳しくいへば缺圓形で、兩方に垂直な部分がないから、形は大分異なつて見える。この窓も亦翁堂の如く、間を極く僅かあげた水平な木摺の様なので一面に埋めてあるから、採光の點からいへ

ば、あつてもなくても同じである。去りどて大して
裝飾になるといふものでもなし、つまり見られる
ことなしに見る、といふ目的に用ひられたといふ
ことである。翁堂のも或はこの模造かも知れない。

* * * * *

此種の窓は狭間飾が何れも木摺式であるから、
外から内をみるのに不便だが、内から見らるゝ事
なしに外をみるには極めて便利である。さうして
内部からみただころは中々面白い結果になる。さ
うして又翁堂には非常によく似合つてゐる。

楯型窓には輪廓即ち窓枠がないのが普通のやう
である。普通といつても實は前記二例を主として
指したので、また欄間等についてゐるのもさうの
やうである。【古事類苑】(居處部十七、窓の)に【類聚
名物考】より、「古風は丸く有しが、後には今云墨
形の様になりしなり」といふ句を引いてあるが、
これ即ち古しは半圓形であつたのが、後世缺圓形

になつたことをいつてゐるのである。尙ほ、次に
【徒然草】から、

今の内裏つくり出されて、有識の人々に見せ
られけるに、いづくも難なしとて、既に遷幸の
日近くなりけるに、玄輝門院御覽じて、閑院殿
のくしがたの穴は、まろくふちもなくてぞあり
しと仰せられける、いみじかりけり。

といふ文を引いてあるが、この「まろくふちもな
くて」といふのは、即ち半圓形で窓枠のなかつた
ことに違ひない。さうしてこの形式が即ち古式で
あると思はれる。

* * * * *

第三五九圖は本派本願寺境内、百華莊茶室の瓢
型窓である。圓窓ならいくらもあり、前々號にも
二つばかり例を擧げておいたが、瓢箪形をしてゐ
るのは珍らしからう。瓢箪をこれ丈け便化したと
ころがいのちで、中々できるものではない。

* * * * *

扱て最後に第三六〇圖にだしたのは桂離宮構内の茶室松琴亭の窓。何といつたら適當か。これは既に圖示した謂はゆる猪目型なるものを上から敲き潰したやうなもので、さうした場合下側は平たくなり、先づこの様な形になり勝である。故にこれも亦あの中へ入れべきものかも知れぬが、少しく型も異なるし、殊に下地窓で俛も全く違ふために、今は別に取扱つておくことにしたのである。曩に記した美濃の禪昌寺庫裏の下地窓はこゝにかいた方がいゝかも知れぬ。なせなら同じ下地窓であるから。

* * * * *

以上私は連子・花頭・花狹間・圓等の諸窓を除き、其以外のものを一纏めとし、圖を掲げて簡単な解説をしておいたが、此種のものに古いのは一つもなく、何れも極く古くて桃山、新しいものは

昭和迄と心得てよろしい。

而して以上の十八種は、よく例へにあるやうに九牛の一毛どころではなく、百牛千牛の一毛にも及ばないので、いくらでも種類があるから、いくら例を引いてもきりが無い、だからこれ位にしておいていゝのである。さうしてつまり

各種異形の窓は桃山以降多く用ひらるゝことになつた。殊に住宅が發達してからは、民家の種類が多いのである。之に反し社寺のは殆んど變化がなく、多くは前よりの型を踏襲してゐるのである。但し少なくとも楡型窓丈けは古いのである。

といふことになるであらう。

窓。終。

* * * * *

附 録

前號に花頭窓のこゝを書いた終りに、彦根城の例を擧げて、

此種の窓が城堡建築にまで用ひられたことを述べておいたが、實は本月十四日、岐阜縣大野郡莊川村岩瀬(庄川の東岸)、矢筈原皇氏の住宅の妻の窓に於いてみた。切妻造の大きな謂はゆる「合掌造」の建物で、其兩妻に一つづゝあつた。現在では後ろから板があてがつてあつたが、いづれ以前は採光兼煙拔きの用をなしたものであらう。勿論江戸時代のもではあるが、この様なところに用ひられた例は、私は初めてみたのである。同じ岐阜縣のあるところの有名なある寺では、新しく建てた便所の窓に用ひてあつた。

最も上品なところに用ひた例は、いくつもあらうが、桃山時代のまきかくつもりでゐて、つい忘れたことを追加しておかう。松島の瑞巖寺の上段の間の床の後ろについてゐるのが夫れである。其上段の間の隣りが上々段で、こゝは明治天皇の玉座になつたことがある。この床の間についてゐる花頭窓は框が黒漆塗で金銅飾金具を打ち、其後に兩引の板戸(?)をたて、其面は床ま同じく金地に彩色の繪がかいてある、故に戸を兩方に引きあげれば、直に窓となり採光の目的を達するやうになつてゐる。これは確かに最上位の花頭であらう。

—(昭和五年八月二十六日稿了)—